
仮面ライダーディケイドAnother ～世界の救世主～

激突皇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド Another 〱世界の救世主〱

【Nコード】

N4644X

【作者名】

激突皇

【あらすじ】

無限に存在するいくつもの世界。そのいくつもの世界に崩壊の危機が訪れる。世界の崩壊を企む巨大な陰謀。それに対抗するため世界はある一人の少年を世界の救世主である「仮面ライダーディケイド」に選んだ。彼は世界の崩壊を阻止するため、別の世界へ旅に出る。果たして、世界の崩壊を企む巨大な陰謀を阻止し、彼らは自分達の未来を守ることはできるのか。「一度決めたことは絶対に貫き通す！それがオレだ！！」全てを紡ぎ、未来へ導け！

プロローグ く始まりし救世主の物語く（前書き）

自分の初投稿小説です

暖かい目で見えてください

では、どうぞ

プロローグ　〈始まりし救世主の物語〉

「ここは・・・」

目の前に見えるのは無限に広がる闇
その中に彼は一人ポツンと立っていた

「なんでオレ、こんなところにいんだ・・・？」
わけもわからず混乱する彼に何かが話しかけてきた

・・・れし・・・ね・・・

「だ、だれだ!？」

・・・え・・・れし・・・うねんよ・・・

「何いってんだ? 聞こえねえよ!」

・・・選ばれし少年よ・・・

「選ばれし少年・・・ってオレのことか!？」
その質問に答えるように謎の声は言葉を変えた

・・・世界に崩壊の危機が訪れている・・・

「世界に崩壊に危機? どういうことだ!？」

・・・君に救世主に力を与える・・・

・・・その力で・・・

・・・せ・・・をす・・・て・・・れ・・・

「ちよっ、オイ！　までよ！　どういふことだ！　救世主の力ってなんだよ！？」

謎の声が遠ざかっていくのが判る

「オレの質問に答えろ！　オイ！！」

・・・たの・だぞ・・・大和・・・

その言葉を最後に彼の意識は遠のっていった

エピソード0 〈日常の崩壊〉

「・・・と・ん・・・、や・とくん・・・」

また声が聞こえる

でもこの声はさっきの声とは違って聞きなれた声のような気がする

「やまとくん・・・、大和くん・・・!」

この声はみさ・・・

「^{よしの}芳野 ^{やまと}大和お!!」

「はいいい!!」

な、なんだ!? いきなり声が野太くなったぞ!?
そう思いつつ反射的に立ち上がる

「「「「・・・」」」」

周りの視線がオレに集まる

ええっと、まず状況を整理しよう

ここは教室、今は五時限目の日本史の授業
そして目の前にはご立腹の日本史の教師

「よお芳野、俺の授業はそんなに退屈だったか?」

・・・状況理解、つまりオレは授業中に寝ていたというわけだ

「いやあ、先生の授業がつまらないわけではなくてですね、飯食った後って眠くなるじゃないですか・・・それで気がついたら・・・」

「寝てたというわけか・・・」

「はい・・・すいません・・・」

「はい・・・」

「はい・・・」

ふう、普段ある程度まじめにしていたおかげであんま怒られずにすんだか

・・・にしても、あの夢っていったいなんだったんだ・・・？

教科書を読み終えたオレはあの夢について考えていた

「もう、大和くん授業中に寝ちゃだめでしょ」

授業が終わり次の授業の準備をしていると隣の席から「望月 もちつき 美咲 みさき」が話しかけてきた

美咲はオレがやかいになっている家の孫娘で小さい頃からの付き合いだ

「しゃあねえだろ、気がついたら寝てたんだから。てか起こしてくれよ気づいてたんなら」

「起こしたよ、でも全然起きないんだもん」

「うっ・・・ま、まあいいじゃねえか、あんま怒られなかったんだ

し」

「そういう問題じゃないでしょ、もう・・・」

そんなやり取りをしていると

「あいかわらず仲がよろしいですなあお二人さん」

声の方を向くといつもつるんでいるダチ二人がやってきた

「そうか？ふつうだろ」

「いやいや、お前らふたりは普通の男女の友達関係とは違う仲の良さだよ、うん」

「そりゃそうだろ、家族みたいなもんなんだから」

「いやまあそうなんだけどよ、なんつーかよ、うーん・・・」

ダチの一人（男）が考えているともう一人（女）が

「言うなれば長年寄り添って生きてきた、まさに夫婦のような関係！じゃないかな？」

「ふうええ！！ふふふ夫婦！？」

その言葉に美咲が顔を真っ赤にして驚く

「おお！そうだよそれぞれ、俺が言いたかったのはそういうことなんだよ」

「夫婦って、お前らなあ・・・」

「あはは、まあ冗談はこの辺にして二人とも今日放課後暇？」

「冗談って・・・まあとくに用事はないが美咲はどうだ」

「ふ、夫婦・・・大和さんと夫婦・・・」

うつむいてなんかぶつぶつ言ってる

「おーい、美咲」

「ふえ!?! な、なに!?!」

また顔を赤くして驚いた

・・・ちよつとは落ち着け

「だからあ、美咲ちゃんは今日放課後暇かってこと」

「あ、う、うん暇だようん」

「ならさ、今日みんなでどっか遊び行かない?」

「ああいいぜ」

「うん、私もいいよ」

「よっしゃ、んじゃ・・・」

するとチャイムが鳴った

「おっと、時間切れか。じゃつまた後でな」

「約束だよー」

二人が各自の席へ戻って行きオレ達も席についた

「じゃあなー」

「美咲ちゃん、大和くん、また来週」

「おう」

「バイバーイ」

放課後四人で遊んだ後、時間も頃合となったので帰ることにした

「……………」

オレと美咲の間に会話はない
なぜなら家も一緒、クラスも一緒ともなれば話すことなんてほとんどない

でもそんなことは昔から同じなので気まずさとかはない
むしろこうやって無言で帰るのはなんとなく落ち着く
たぶん美咲もそうなんだろう

このときの美咲はなんつか、自然な笑顔をしているし

そんなこんなで家に到着

《望月写真館》

ここがオレがやかかいになっている家、もとい店である
といっても今は写真館というより喫茶店に近い店になっている

「「ただいまー」」

「おお、二人ともおかえり」

カウンターから話しかけてきたのはこの店の主人でありオレ達を育ててくれている

「望月 もちづき 宗太郎 そうたろう」じいちゃんである

「おかえりー、大和君、美咲ちゃん」
「おかえり」

ここの常連の人達からも挨拶を受け軽く会釈をしてオレ達の日課を行う

「・・・・・・・・」

オレと美咲はお茶の間にある仏壇に線香を焚き手を合わせている
写真は三つ

一つは優しそうな顔のおばあさん

オレ達のばあちゃんである

ばあちゃんはオレを拾ってくれた人で三年前にこの世を去っている
残りの二つもばあちゃんに負けないほど優しそうな顔をしている
違いを挙げるとするとこの二人は二十代後半の若い男女であることだ
この二人は美咲の母親と父親だ

十年ほど前、親子三人で歩いているところにトラックが突っ込み、
二人は美咲をかばってトラックに轢かれこの世を去った
両親を失った美咲はじいちゃんとはあちゃんが引き取ってオレとい
つしよに育ててくれた

そして今はオレ、美咲、じいちゃんの三人でこの家に暮らしている

日課が終わり、自分達の部屋へ向かおうとすると

「あれ？美咲、頼んどいたものは？」

「え？・・・あっ！」

そう言われ美咲は何かを思い出したようだ

「ごめんおじいちゃん、今すぐ買いにいつてくる！」

どうやらおつかいを頼まれていたのを忘れていたようだ
そして鞆から財布だけを取り出し脱兎のごとく飛び出していく

・・・しゃあねえ

「美咲、オレも行く！じいちゃん、鞆よろしく！」

そう言いじいちゃんに鞆を投げ美咲の後を追う

じいちゃんは少し驚いていたがたいして中身入ってないしだいじょうぶだろう

少し走ったところで美咲に追いついた・・・そう思ったら

ドゴオオオオオオン！！

「!？」

突然爆発のような音がしてその方向へ振り返る

「な、なんだ!？」

その先には煙がいくつも立っていた
なにがどうなってるんだ？混乱していると後ろから

「大和くん!！」

美咲が泣きそうな声でオレを呼ぶ

また振り返るとオレと美咲の間に目の前にオーロラのようなものが
出現していた

「なんだよこれ!？」

次の瞬間、そのオーロラがオレを包み込む

「なっ!？」

「大和くん!！」

美咲の叫び声を最後にオーロラに包み込まれたオレはあのときの夢の場所にいた

エピソード0 〈日常の崩壊〉（後書き）

どうも、激突皇です

第一話いかだったでしょうか

次回からはディケイドらしくなっていくしますので

未熟な作者ですがよろしくおねがいします

エピソード0 く託された力く（前書き）

就職試験オワタ

てなわけで、どうぞ

エピソード0 〈託された力〉

「ここは・・・」

オーロラに包まれたオレはどこかに飛ばされたようだ
最初こそあの時の夢の場所と思ったが

今いる場所はある無限に広がる闇の空間ではなく
代わりに無限といえる程の地球に似た丸い物体が漂っていた

「・・・選ばれし少年よ」

「この声は・・・」

声に振り返るとそこには黒いコートに白いマフラーを巻いたパツと
見20前半の青年が立っていた

「やっと会えたな、選ばれし少年 いや、芳野 大和」

「あんたは・・・あの時の声の主ってわけか？」

そう聞くと青年はオレに近づいてきた

「ああ、そうだな・・・ツカサ、とでも読んでくれ」

「なんか引つかかる言い方だな」

「いずれ話してやる、だが今は時間がない」

そういうとツカサと名乗った青年は丸い物体の一つに近づいていった

「今この無限に存在する世界に崩壊の危機が訪れている」

「世界の崩壊・・・あの時も確かそう言ってたがどういことなんだ？」

「さっき、君のいた世界でなにか起こらなかったか」

その言葉にはっとする

「そうだ、美咲を追ってたらいきなり後ろから爆発が起こったんだ」

「その爆発の原因こそ世界を崩壊させようとしている連中だ」

「なんなんだ？その連中ってのは」

「まだ判らない、だが君の世界で行われていることこそ、世界の崩壊につながることもんだ」

「どういことだ」

その質問にツカサは丸い物体に手をかざしながら答える

「それぞれの世界にはそれぞれの物語がある。だがそれが崩されることにより世界は簡単に壊れてしまう」

オレは黙って次の言葉を待つ

「それを知った連中は次々と世界を破壊していった。奴らの目的がただの破壊活動なのか、それともなんらかの目的があるのかはわからないが・・・」

「野放しにはできねえってことか」

ツカサは黙って頷き言葉を続ける

「そこで俺は君に白刃の矢を立てた」

「オレに・・・？」

「ああ、理由は判らないが君の身体にこの力が適合したんだ」
「これは・・・」

ツカサの手には九つの不思議なシンボル刻まれた箱のようなものとファイルのようなものがあつた

「《デイケイドライバー》と《ライドブッカー》、救世主の力の象徴だ」

「救世主の力・・・」

ツカサに手渡されデイケイドライバーとライドブッカーを受け取った

「使い方等は頭の中に入っているはずだ」

「・・・ホントだ、使い方が判る」

てかなんでわかるんだ？

そう思っていると突然世界が歪む

「なんだ!？」

「時間切れか、大和!」

ツカサの声と共にさっきのオーロラが現れる

「君を元の世界へ戻す、その力で奴らの野望を阻止し、世界を救ってくれ!」

「・・・」

オレは目を閉じそして

「それはオレにしかできないことなんだな」

この言葉にツカサは少し驚いていたがまた真剣な顔付きになり

「ああ、そうだ」

「ならやってやる！ 世界だろうがなんだろうがまとめて救ってやる！」

オレのこの言葉にツカサはフツと笑い

「たのんだぞ、芳野 大和！」

その言葉を最後にオレは元の世界に戻った

だがそこはさっきの場所じゃなく

「なんだよ・・・これ・・・」

ボロボロになっていた商店街だった

「きゃあああ！」

この声は！

「・・・美咲！！」

エピソード0 〓託された力〓（後書き）

中途半端かもしれませんがこれでいいのです

次回は美咲視点の物語です

大和が行った後美咲は・・・という話です

エピソード0 く守ってくれる人く (前書き)

美咲視点でお送りいたします

では、どうぞ

エピソード0 守ってくれる人

「そんな・・・」

目の前から大和くんがいなくなった

「大和くん・・・」

私の大切な人がまた、いなくなった

お父さんとお母さんが目の前で倒れている映像がよみがえる

「あ・・・ああ・・・」

涙が次々と零れる

ドゴオオオオオン！

「っ!？」

また爆発が起きた

正直動きたくなかったけどここにいたら巻き込まれるかもしれない
私は涙をぬぐい商店街へ向かうことにした

「大和くん・・・」

大和くんのことを思いつつ私は走り出した

「なに・・・これ・・・」

商店街に着いた私は驚愕した

「助けてくれー！ー！」

「いやああああ！」

「がはあっ！」

昨日までの賑わいはそこにはなく

灰色の鎧をまとったようなのやカマキリのような怪物が人々を襲っていた

「そんな・・・これって・・・」

目の前の出来事に混乱し後ろへ後ずさる

「！」

「ひっ！」

怪物のいくつかが私に気が付き近づいてくる

「い、いや・・・」

私が怯えるのも気にせず怪物たちが歩を進めてくる

「きゃあああ！」

叫びながら私は思いっきり駆け出した
それを追うように怪物たちも走り出す

恐い、助けて・・・

そう願う無我夢中で走る

でも私はここまで走ってきて体力もほとんどなくなっていたので
足がもつれてしまい倒れてしまう

「きゃっ！」

立ち上がろうとするけど恐怖と疲れで足に力が入らない
そして振り返るとそこには怪物が立っていた

「ひっ！」

灰色の怪物が私に爪を向け、それを振りかぶる

私・・・死ぬのかな・・・

そう思った私の頭に走馬灯のように今までの出来事が流れる

友達と一緒に遊んだこと・・・

学校でおしゃべりしたり勉強したこと・・・

家族でいろんなところへ行ったこと・・・

そして最後にお父さんとお母さんのお葬式のこと思い出した

「ぐすっ・・・おとうさぁん・・・おかあさぁん・・・」

私はただただ泣いていた

私をかばいお父さんとお母さんは死んでしまった

二人にもう二度と会えない、その事実には私はただ泣き続けるしかなかった

「うっ・・・うううう・・・」

そんなとき、泣いている私の手を誰かが握ってくれた

「うっ・・・やまとくん・・・？」

大和くんだった

おばあちゃんが拾って育てているという男の子

そのときにはもう何度か会っていたから認識もあったし一緒に遊んだりもしていた

そんな大和くんが涙を流しながら私の手を握っていた

「おれが・・・まもってやる」

「え？」

「おれが・・・おじさんとおばさんのかわりに・・・おまえをまもってやる！」

「大和くん・・・」

怪物が振り上げていた爪を振り下ろそうとした

「・・・大和くん!!」

目をつぶり、名前を呼ぶ

「美咲に・・・手え出すんじゃねええええええええ!!」

ドカァ!

「!?!」

その声に目を開け前を見ると

怪物は奥に倒れていて

代わりに一人の男の子が立っていた

そこには今一番聞きたかった声が・・・

「ふう・・・」

今一番見たかった姿が・・・

「大丈夫だったか」

今・・・一番会いたかった人が・・・

「美咲」

大和くんがいた

エピソード0 く守ってくれる人く (後書き)

大和・・・自分で書いというカッケェなオイ

てなわけでいかがでしたか

次回はついに大和が変身します

エピソード0 く戦士の力く（前書き）

ついに大和の変身&戦闘です
少し長いかもしれませんが、どうぞ

エピソード0 く戦士の力く

「ふう・・・」

全速力で走り、その勢いで灰色の怪物を殴り飛ばした大和は拳を握ったまま他の怪物の前に立つ

「大丈夫だったか」

そして助けた少女の方へ振り返り

「美咲」

その名を呼んだ

「大和・・・くん・・・？」

美咲はその存在を確認するように名前を呼んだ

「ああ、そうだぜ お前のよく知る芳野 大和だ」

そう大和が言うと美咲の目から涙が流れ出した

「なっ、どうした！？ どっかやられたのか！？」

突然美咲が泣き出したので大和は異様なほど慌てだした

「ううん、違うの」

その言葉に大和の動きはピタッと止まる

「突然目の前から大和くんがいなくなって、もう会えなくなっちゃうんじゃないかって思ってた。でも来てくれた、また私を助けてくれた。また・・・会うことができた」

「美咲・・・」

「それがうれしくて・・・」

そう言いながら美咲は涙をぬぐう
大和はフツと笑いその頭をなでる

「あっ・・・」

「オレはお前をおいていなくなったりなんかしねえよ」

大和はなでていた手を放し、美咲が顔を上げ大和の顔を見上げる

「あの時約束したろ、オレがおじさんとお婆さんの代わりにお前を守ってやるって」

「・・・」

大和がそう笑顔で言うと美咲は顔を赤く染める

（覚えててくれたんだ・・・）

あの時自分を救ってくれた言葉を覚えていたことに美咲は喜びを覚えていた

「さあて、待たせたなてめえら」

言いながら大和は振り返り怪物を睨みつける

彼が殴り飛ばした怪物もすでに立ち上がり大和を睨みつけている様に見えた

「こいつを襲おうとしたんだ・・・てめえら、命の保障はねえぞ」

そう言った大和はポケットにしまっていたディケイドライバー腰にかざす

するとドライバーからベルトが出てきて大和の腰に巻きつく

それを確認してからバックルを開きベルトの左側にライドブッカーを取り付けカードを一枚抜き取った

そのカードには顔に七本の縦線が入っており緑の目にマゼンダ色のボディをした戦士が描かれていた
それを目の前に突きつけ

「いくぜ、変身！」

その掛け声と共にカードを裏返し開いたバックルに差し込み、バックルを閉じた

『KAMEN RIDE DECADE!』

電子音のような声が響き、大和の周りに九つの人型の影が出現しバックルから七枚の赤いプレートが飛び出る

そして人型の影が大和に集まりその体を包み込む

そして赤いプレートが仮面に突き刺さり体の透明な部分をマゼンダ色に染める

最後に目が緑色に光り、大和はカードに描かれていた戦士

「仮面ライダーディケイド」に姿を変えた

「大和・・・くん・・・？」

「美咲、危ないから少し下がってろ」

美咲は戸惑いながらも頷き後ろへ駆け出す

「さあ・・・いくぜ！」

拳を握り、大和・・・いや、ディケイドは怪物に向かって走り出す
そしてさっきの灰色の怪物にまたパンチを叩き込む
後ろから虫のような怪物が攻撃を仕掛けるもそれをかわし逆に蹴り
を入れる

だがもう一体の灰色の怪物に攻撃を食らってしまう

「ぐっ・・・」

よろめくも体制を立て直し相手を見直す
すると頭の中に情報が流れ込んでくる

「灰色のがオルフェノクで虫みたいなのがワーム・・・か」

怪物の正体が判り、ディケイドはカードを抜き取る

「先にオルフェノクからやるか」

バックルを開き抜き取ったカードを差し込みバックルを閉じる

『K A M E N R I D E F A I Z !』

するとバックルにギリシャ文字のΦに似たマークが浮かび上がり
ディケイドを別の姿、体中に赤いラインの入った「仮面ライダーフ
アイズ」に変えた

「また変わった・・・？」

遠くで美咲が驚く

そして二体のオルフェノクに攻撃を当てひるませてからまたカードを抜き取りバックルに差し込む

『FORM RIDE FAIZ! ACCEL!』

ディケイドファイズ（以下Dファイズ）の胸の部分が開きファイズアクセルフォームへ変わる
そして腕のスイッチ押す

『Start Up』

その電子音が合図にDファイズが超高速で動き出し二体のオルフェノクとワームに攻撃を当てていく

「こいつでとどめだ！」

再びカードを抜き取りバックルに差し込む

『FINAL ATTACK RIDE FA, FA, FA, FA
IZ!』

刹那、二体のオルフェノクとワームの周りに赤い三角錐のフォトンブラッドが現れ目にも止まらぬ速さで突き刺さる

「うおらぁ!!」

『3, 2, 1・・・』
『Time Out』

電子音が鳴り終わると共にDファイズが現れ、開いていた胸の部分が閉じ元のファイズへ戻る

それと同時に二体のオルフェノクはファイズの紋章が浮かび上がり灰となった

するとバツクルが勝手に開き中からファイズのカードが飛び出しデイクイドの姿に戻ってしまう

「なんだ？」

飛び出したカードを見るとさっきまで描かれていたファイズの絵が消えていた

「大和くん！危ない！」

後ろからの美咲の声に振り返ると目の前にワームがいてデイクイドに腕の鎌を振り下ろした

「ぐあっ！」

避けきれず攻撃を喰らうもまた体制を立て直しワームに殴りかかる

「くっ・・・この！」

だがその直後さっきのDファイズアクセルフォームのようにワームが超高速移動する

「なに！？」

そしてまた攻撃を喰らってしまふ

「がはっ！」

そして思い出す、さっき見たワームの特徴を

「クロックアップか・・・なら！」

また新しいカードを取り出し、差し込む

『KAMEN RIDE KABUTO!』

するとバックルにカブト虫のような紋章が浮かび上がり

ディケイドをカブト虫に似た戦士、「仮面ライダーカブト」へ変える
そしてすぐさま別のカードを差し込む

『ATTACK RIDE CLOCK UP!』

再び超高速移動をするディケイドカブト（以下Dカブト）

そしてクロックアップしていたワームと鉢合わせる

「!?!」

「悪いが虫は好きじゃないんでな、とっとと決めさせてもらうぜ！」

そう言い、新たにカードを差し込む

そしてワームがDカブトに向かって飛び掛ってくる

『FINAL ATTACK RIDE KA, KA, KA, KA
BUTO!』

バックルから頭の角へ、角からDカブトの右足へエネルギーが流れ
飛び込んできたワームにDカブトは回し蹴りを叩き込む

「おらぁ!!」

回し蹴りを喰らったワームはその場で爆発し、そして

『CLOCK OVER』

クロックアップの効果が切れ、またバックルが開きカードが飛び出
てきて

ディケイドの姿に戻った

「またか・・・」

そしてカブトのカードもまたなにも描かれていなかった

もう回りに敵がないことを確認すると

再び閉じていたバックルを開き変身を解除した

「大和くん!」

後ろで避難していた美咲が大和が変身を解除したのを確認してから
駆け寄ってくる

「これでひとまず大丈夫なはずだ」

ドライバーをポケットにしまいながら美咲の方へ振り向く

「うん・・・でも今のって・・・」

「ああ、後で話す。それよりじいちゃんが心配だ、家に戻ろう」
「う、うん」

二人は望月写真館に向けて走り出した

途中怪物に出くわしたが別のカードを駆使し倒した

だがやはりディケイド以外のカードは使った後何も描かれてなかった

エピソード0 く戦士の力く（後書き）

ううむ、戦闘シーン入れたらちと長くなってしまった

次回はエピソード0完結の予定です

エピソード0終わったら新しい小説書きたいな・・・

エピソード0 〈始まる物語〉（前書き）

エピソード0、完結！

ってことでどうぞ

エピソード0 〈始まる物語〉

『FINAL ATTACK RIDE A, A, A, AGIT
O』

「おらぁ！」

ディケイドアギト（以下Dアギト）の跳び蹴りが炸裂し怪物、アン
ノウンが頭の上に天使の輪のようなものを浮かべた後爆発した
そしてDアギトの腰のバックルが開きディケイドを除くカメンライ
ドカードの最後の一枚、アギトのカードがバックルから飛び出し、
描かれていた戦士の絵が消える

「これで最後・・・結局こいつ以外全部使った後絵が消えちゃった
な」

ディケイドのカードを見つめながらアギトのカードをライドブツカ
ーにしまいそう言う

「美咲、もう大丈夫だぜ」

「うん・・・」

大和にそう言われ物陰に隠れていた美咲が駆け寄る

ここまで来るのに幾度も怪物達に襲われその度大和が倒していた
美咲が大和の隣に並んだのを確認すると大和は歩を進めた

少し歩くと自分達の目的地、望月写真館に着いた

「さて、やっと着いたな」

そう言いながら自分達の住む家を見上げる
すると隣にいた美咲が大和に寄りかかる

「美咲？」

「ごめん・・・少し疲れちゃった・・・」

無理もない、突然いくつもの怪物が出現し、それを家族同然に育った大和が倒すという非日常に遭遇したのだから
もともと体力の多くない美咲にはかなりきついものだった

「無理すんな、もう家なんだからとっと入って休んだ方がいい」
「うん、ありがとう・・・」

寄りかかった美咲に肩を貸して大和は自分達の家に入る

「ただいま、じいちゃん」

「ただいま、おじいちゃん・・・」

「おお大和くん、外が騒がしかったけど何かあったのか・・・って
美咲、どうしたんだい？」

奇跡的に宗太郎は写真館から一步も出ていなかった

「ちといろいろあって疲れたんだ、部屋で休ませてくる」

「そうかい、何があったかは後で教えてくれればいいからそうして
やってくれ」

宗太郎の言葉に頷き大和は美咲を部屋につれていった

美咲を部屋のベッドに寝かせると大和はその辺にあったクッションに腰掛ける

「ありがとう、大和くん」

「気にすんな、何か欲しいものとかあるか？」

「ううん、大丈夫・・・」

「そっか・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人に気まずい沈黙が流れる

その沈黙に耐えられなくなったのか大和が

「ええっと、とりあえずなんか飲み物持ってきて来るな」

そう言い立ち上がろうとすると

「あっ、待って！」

美咲が手を掴みそれを制する

「な、なんだ？」

「あっ、えっと・・・その・・・」

理由もなしに引き止めた美咲は戸惑い、少し考えそして

「り、りんごジュースが欲しい・・・な」
「・・・・・・・・」

思いがけない言葉に大和は固まり

「プッ！」

「え？」

「あっはははははは！」

壮大に大笑いした

「ふえ！？」

大和の笑い声に今自分がどんなことを言ったのかを思い出し美咲は顔を真っ赤にした

「ちょ、ちょっと！そんなに笑わないでよ！」

「ははは、すまんすまん。なんつかさ、気が抜けてさ」

「む、どうということ？」

美咲をなだめ、大和は腰を再び下ろす

「いや、いきなり世界を救えとか言われたりあんな化けモンと戦ったりしてさ、正直気が重かったんだ。でも今ので気が楽になった」

「世界を救う・・・？」

「ああ、これから話す。でもその前に」

「？」

ワンテンポ置いてニヤツと笑いながら大和はこう言った

「りんごジュース持ってきてやる」

その言葉に美咲は再び顔を赤くし

「もう！大和くん！」

怒る美咲に笑いながら大和はジュースを取りに行った

戻ってきた大和は美咲にジュースを渡し、自分も飲みながらあの場所でのことを美咲に説明した

「・・・で、オレにそのディケイドの力が適合したってわけだ」

「救世主の力、ディケイド・・・」

「ああ、んでその力で世界の崩壊を阻止できるってことだ」

一通り話し終わると手に取っていたジュースを一気に飲み干した

「ふうん・・・なんか、大変なことになってたんだね」

「でもオレにしかできないことなんだ、やるっきゃねえだろ」

・・・そのとおりだ・・・

「「!」?」

突然部屋に声が響くと二人をあのオーロラが包んだ

「えっ！ここ、どこ！？」

「ここは・・・さっき言った場所だ。　んで、今の声は・・・」

声の主を探し、大和はキョロキョロと見回す

「こっちだ、大和」

その声に二人は振り返る。するとそこには

「思ったより早い再会だったな、ツカサ」

大和にディケイドの力を託したツカサがいた

「え？この人が？」

「ほう、説明したのか。　聞いているとおり、俺がツカサだ」

ツカサは美咲の方を向き自己紹介をした

「あ、は、はじめまして！私は望月　美咲です」

美咲も自己紹介をし頭を下げた

「んで？今度はどうした？」

「うむ、それは君達に伝えておくことがあってな」

その言葉に二人は耳を傾ける

「まず一つ、大和、君の活躍で君達の世界は崩壊の危機から救われた」

「なに？ ホントか？」

「ああ、君がああの人たちを倒していなければそのままの世界は崩壊していた」

その事実にも美咲が質問する

「で、でも大和くんが倒した怪物以外にもたくさんいましたよ。それでも救われたんですか？」

「そこで二つ目だ、世界の救世主とされるディケイドが現れたことで奴らがそれを脅威と感じ始めた」

「ん？それとオレ達の世界が救われたのと同じような関係があるんだ？」

「つまりディケイドというこれまでにない脅威に奴らも分が悪いと判断したのだろう、それであの世界の破壊を捨て退散したというわけだ」

「なるほどな」

大和は納得し、ふとあることを思い出す

「そういやディケイド以外のカードが使った後得が消えたんだがあれってどういうことだ？」

「それが三つ目だ」

ツカサはそう言う二人に背を向け地球のようなものに歩み寄る

「この無限に存在する世界、その全てが君達の世界のような平凡な世界とは限らない。科学がとてつもない進歩を遂げた世界、科学のかわりに魔法が栄えた世界、また、その二つが両方ある世界と様

々だ。」

そんな世界があることに二人は少なからず驚いていた
その二人を差し置いてツカサは話を続ける

「だがその全てが平和であるとは限らない、一つの大きな力をめぐ
り戦争する世界、奴らのような連中に支配された世界、人類とモン
スターが争いを続ける世界だってある」

そんな事実二人はまた驚き大和は眉を潜め美咲はつらい顔になった

「そんな様々な世界に存在する人のために戦う戦士、『仮面ライダ
ー』。その中の九人の力を使い、戦うライダー、それが・・・」

「『仮面ライダーディケイド』、世界の救世主ってわけか」

「ああ、そのとおりだ」

「んで、その九人の力って奴は無くなっちゃったみたいだが？」

「それは、その九人のライダーは今はいないからだ」

「なんだって!？」

大和だけでなく黙って話を聞いていた美咲も驚愕する

「んじゃあオレはディケイドの力だけで戦わなくちゃなんねえって
ことか!？」

「いや、そうじゃない。 たしかに九人のライダーはもういない、
だがその力は各世界の少年達に受け継がれている」

「どういうことだ？」

「つまり」

ツカサは二人に向かって振り返りこう言った

「その世界のライダーと力を合わせ、その世界を救え。そうすればその世界のライダーの力がカードに宿る、というわけだ」

そのスケールのでかい目的に大和は少し驚くが元の表情に戻り

「なるほど、んでその世界とやらにはどうやって行くんだ？」

「それは君達の住む写真館を使うんだ」

「家を？」

「うむ、かつてのディケイドも使用した方法だ」

「かつてのディケイド？そんなのいたのか」

「ああ、といっても昔の話だ。俺も存在したということぐらいしか知らない」

「あの、それでどう写真館をつかうんですか？」

「背景ロールを使うんだ」

「背景ロールってあの写真を撮るときに背景を変えるあのあれか」

「ああ、それを回すことで別の世界へ行くことができるようにしておいた」

「しておいたって、何かしたんですか」

「すこし君達の家の手を施した」

「あんた人に黙ってなにやってんだ」

「いやすまない、緊急事態だったものでな」

謝りながら再び二人に近づく

「とまあこれで君達に伝えることは全て伝えた。最後に大和、君にもう一度聞いておく」

「なんだ？」

「奴らの野望を阻止し、世界の崩壊を防いでくれ！」

その言葉に美咲は大和の方に顔を向ける

その大和はニヤツと笑い、真っ直ぐツカサを見つめこう言った

「いいか、よく聞け！ 一度決めたことは絶対に貫き通す！それがオレだ！！ 何度聞かれてもやってやるって答えてやるよ！」

ツカサはそのセリフにフツと笑いオーロラを二人の近くに発生させる

「そうか、なら頼んだぞ。 芳野 大和！」

そして目の前からオーロラが消えると二人は元の部屋に戻っていた

「戻った・・・か」

「・・・・・・・・」

美咲は少し暗い顔つきでベッドに腰掛ける

「ねえ、大和くん」

「ん？なんだ？」

「私に、できること・・・あるかな？」

「・・・・・・・・」

その言葉を聞くと大和は真剣な顔になった

「私はその・・・救世主の力とかそういうのは無いし、戦うことはできないけど・・・」

「美咲・・・」

「それでも、私は大和くんの力になりたい!」

そう言う美咲の顔はとても真剣な顔だった

そして大和はその美咲の頭に手を置く

「だったら、一つだけ頼まれてくれねえか」

「？」

「オレが戦いに行ってる間、帰りを待っていてくれ」

「え・・・？」

その言葉がどういう意味なのか判らず声を上げる

大和は頬を掻きながら照れくさそうに

「いやさ、自分の帰りを待ってくれる人がいるとき、なんか落ち着くだろ。だからさ、本読みながらも、飯作りながらもいいから待っててくれ。」

「大和くん・・・私待つよ! 大和くんが帰るの!」

「ああ、頼んだぜ、美咲」

「うん!」

二人は真剣な顔から笑顔に戻っていた

「おや、美咲、もう大丈夫なのかい？」

二人が下に降りると宗太郎は夕食を作っていた

「うん、それより材料足りる？」

「なあに、店の余り物を使えばなんとかなるさ」

「そっか」

「なあ、じいちゃん。あの背景ロールってやつ使えるか」

「ん？たしか使えるはずだよ。でもなんでまた？」

「いや、ちよつとな」

「そうかい、あれは自由に使ってかまわないよ」

「ありがとう、じいちゃん」

「それより二人とも、これを運んでくれ」

「あいよ」

「はい」

「さて、これか」

夕食を終え、大和と美咲は例の背景ロールの前にいた

「これを回すと別の世界に行けるんだね」

「あいつの言うことが正しけりゃな、んじゃ、いくぞ」

大和は背景ロールを回す鎖を握る

「あ、待って」

そう言い美咲も鎖を握る

「よし、せーの！」

二人で一緒に鎖を引く、すると背景ロールの絵が変わる

「これは・・・」

そこには古代遺跡のような場所に大きく描かれた古代文字があった
その絵を見た瞬間、大和の頭に情報が流れ込んでくる

「『クウガの世界』・・・か」

一人の少年と一人の少女の世界を救う旅が、今始まった

次回、仮面ライダーディケイドAnother

「これがクウガの世界か」

「ふええ、他の世界でも学校に通うんだ」

「俺は一之瀬 勇樹ってんだ、よろしくな!」

「未確認生命体出現!」

「変身!」

「こいつがクウガ・・・」

全てを紡ぎ、未来へ導け!

エピソード0 〈始まる物語〉（後書き）

ちよつと詰め込みすぎたかな

だがついにエピソード0終了！

次回からエピソードクウガが始まります

番外編 〓キャラ設定1〓 (前書き)

どうも、作者の激突皇です

今回は番外編ということでキャラ設定の回をお送りします

番外編 〈キャラ設定1〉

ではまず主人公の大和から

名前 ／ 芳野 大和 （よしの やまと）

性別 ／ 男

年齢 ／ 17歳

職業 ／ 高校二年生・仮面ライダーディケイド

身長 ／ 170 cm

体重 ／ 58 kg

容姿 ／ 髪は黒で所々はねている

少し痩せ型の体系で本人はもう少し筋肉を付けたいと思っている

その他概要

正義感が強く困っている人はほっとけない性格、しゃべり方が少しがさつでなにかあるとすぐに首を突っ込むため不良に絡まれることも多かった。（故に多少ケンカ慣れしている）

基本的に恐いもの知らずだが犬とキノコと女の子（特に美咲）の涙は苦手。

思ったことをストレートに言うので普通は恥ずかしくて言えない

ようなことも平然と言ってしまいが逆にそこに惹かれて彼を慕う者も多い。

ずっと一緒に育ってきた美咲のことを意識しているが恋愛の類に疎い為本人は気づいてない。

名前 / 望月 美咲 (もちづき みさき)

性別 / 女

年齢 / 17歳

職業 / 高校二年生

身長 / 158cm

体重 / 本人の強い希望のため省略

容姿 / 髪は茶色っぽい黒でストレート

スタイルはそこそこよく胸は「Dぐらいあるんじゃないか」の「と」のこと(大和談)

その他概要

心優しく気弱そうに見えて意外と物事をはっきり言う性格。

幽霊の類と雷が苦手で遭遇するとすぐに涙目になる。

家事はたいてい得意で特に料理は絶品。

周辺の人(大和以外)に認知されるほど大和に好意を寄せている

がかなりの奥手でその思いは伝えられずにいる。

名前 / 望月 宗太郎 （もちづき そうたろう）

性別 / 男

年齢 / 63歳

職業 / 望月写真館オーナー

身長 / 165cm

体重 / 45kg

容姿 / 髪ほとんどが白髪
眼鏡とセーターを常時着用している

その他概要

だれにでも優しく非常におおらかな性格をしている。

彼の淹れるコーヒーは非常に美味でファンも多い。

親のいない二人を自分の子供同然に育てなによりも大切にしてお
り、また二人からも強く信頼されている。

名前 / ツカサ

性別 / 男

年齢 / 不明

職業 / 不明（後に明かされる予定）

身長 / 約175cm

体重 / 不明

容姿 / 見た目は20代前半
髪は黒で整っている

その他概要

全てが謎に包まれた青年で大和に世界の崩壊の事実を伝え、ディケイドの力を託した張本人。

クールに見えるが意外と熱いところもある。

世界の崩壊を防ぐことに全てをかけている。

とまあ今回は以上です

主要キャラが増える度にこういった番外編をやっていると思います

では

エピソードクウガ 第一章 く世界の巡り方く（前書き）

てなわけでクウガ編、始まります

エピソードクウガ 第一章 く世界の巡り方く

「『クウガの世界』か・・・」

頭の中に入ってきた情報をつぶやく大和
それが気になり美咲が大和に質問する

「クウガ・・・って？」

そう聞かれた大和は情報を読み取るのに集中するため、人差し指を
額に当て答えた

「クウガ、現代に蘇った古代の戦闘種族グロンギを倒すため超古代
民族リントが作り出したベルト、アークルにより変身し戦う戦士、
だそうだ」

額から指を離し、美咲に顔を向けながら言う

「へえ、ディケイドとはいろいろ違うんだね」

「ああ、たしかそれぞれの世界にはそれぞれの物語があるとか言っ
てたから仮面ライダーっつー概念もそれぞれ違うんだろうな」

そう言う大和は背景ロールから離れ近くの窓を開け、外の景色を
見る

「・・・っつか家ごと移動すんのかよ」

「え?」

美咲も窓から外を見る、するとそこには今まで見えていた景色はなく全く別の景色が広がっていた

「うわー、ホントだー」

「これがクウガの世界か」

美咲は窓から見える見たことのない景色に食いつき、大和は自分達の世界とほとんど変わらないもののなにか違う雰囲気になぞり呟いた

「まあ、こんな時間だし行動すんのは明日からになりそうだな」

大和は窓から離れ、側にあつた椅子に腰掛けた

「うん、そうだね。でもどうするつもりなの？」

美咲は窓の淵に腰掛け大和に聞く

「あー、考えてなかった」

「ええ・・・」

大和の気の抜けたセリフに美咲は思わず窓の淵から落ちそうになった

「まっ、明日飯食いながら考えようや。ふわあああ、っとそろそろ風呂入って寝るとすつか」

時計を見ると九時を指しており、大和は欠伸をして眠そうに部屋から出ようとする

「もう・・・、でも私も眠くなっちゃった・・・あふう」

美咲も同意しかわいらしい欠伸をした

「ん？なら先に入るか？」

「うん、そうさせてもらいまーす」

美咲はそう言い眠そうに浴場へ向かった

「さて、どうすっかな」

とたんに暇になった大和は美咲が出るまでの時間をどう過ごすかを考えていた

「ふう、そろそろ寝るか」

風呂から上がり部屋着に着替えた大和はしばらくいじっていた携帯を置き布団に向かう

（にしてもこっちでも携帯使えんのな）

そんなことを今更気がつきつつ布団に入ろうとしていると

「大和くゝん」

美咲の間の抜けた声に動きを止める

「なんだ？」

とりあえず呼んでいるので美咲の部屋に向かう

コンコン

「美咲、どうした？」

美咲の部屋のドアをノックして部屋の主を呼ぶ

「あつ、入って入って！」

なぜか急いでいた美咲にはてなマークを浮かべつつ部屋に入る

「一体なんなんだ？」

「これ見て！これ！」

そう言い美咲は大和に服を突きつける

「なんだこれ？制服？」

ぱっと見、学校の制服だが大和や美咲の通う高校のものではない

「多分そうだと思うけど、今までの制服の隣に掛かってたの」

「うむ・・・一応オレの部屋も見してみよう」

大和は美咲を連れ自分の部屋へと移動する

「こっちにもあった」

クローゼットを開くと今までの制服と別にもう一つの制服が掛かっていた

「ん？なんだこれ」

制服を手にとると一枚の紙切れが落ちたのでそれを拾う

「これは、ツカサから？」

そこにはこう書かれていた

『大和、美咲。君達に世界の巡り方を教えておく。』

「世界の巡り方？」

美咲がそう言い、大和は読み続けた

『君達の元にそれぞれの制服があるはずだ、その胸ポケットに生徒手帳と地図がある。』

そう読み上げた大和は掛けていた制服から生徒手帳と地図の紙を取り出す

『君達にはその場所に記された学校に通ってもらおう。』

「って」

「「えーーーーー!?!」」

二人は声を揃えて驚く

大和は驚きつつも読み続ける

『その学校にはその世界のライダーがいる、そのライダーと共に奴らによる世界の破壊を阻止するんだ。』

「この世界のライダーってことはさっき言ってたクウガっていうのだよね」

「ああ、そのはずだが」

『転校の手続きはすでに済ませてある、その学校で自分のことを説明すれば問題ないはずだ。』

「ほんと何でもありだなオイ」

ツカサの手回しに突っ込みを入れつつ続きを読む

『最後に次の世界でもその世界のライダーがいる場所に行けるよう手を回しておくということをここに記しておく。では、検討を祈る。ツカサ』

「ふええ、他の世界でも学校に通うんだ」

「まあ、この世界でやることは判ったってことだな」

大和は紙切れを丸めゴミ箱に投げ入れ制服をクローゼットに掛けた

「とりあえず明日転校ってことだし今日はいろいろあったんだ、明日に備えてもう寝ようぜ」

「うん、そうだね」

そう言い美咲は自分の部屋に戻っていく

「それじゃあ、おやすみ、大和くん」

「ああ、おやすみ」

大和はすでに布団に潜り込んでおり、美咲はそれを見て微笑みながら自分の部屋へ戻っていった

エピソードクウガ 第一章 く世界の巡り方く（後書き）

クウガ編といっても今回はまだ日にちすら変わっていないという

今回は二人の転校とある少年との出会いです

このある少年とは・・・言うまでもありませんね

エピソードクウガ 第一章 〔転校初日〕（前書き）

てなわけで転校初日の話です

エピソードクウガ 第一章 〈転校初日〉

「これでよしと」

大和は部屋で新しい制服を着ていた
今日はこの世界での学校に転校する日なのだった

「んじゃ、朝飯食いに行っか」

朝食を摂るために部屋から出る

「あっ」

「ん？」

大和が部屋を出ると美咲も新しい制服に身を包み自分の部屋から出たところだった

「お、おはよう、大和くん」

「ああ、おはよう」

「えっと、ど、どうかな？」

美咲はもじもじとしながら大和に聞く

「え？・・・ああ、変なところはないと思うぞ」

「ホント？よかった」

美咲はほっとしたように微笑む、それを無意識に大和は見つめていた
その視線に気づいた美咲は

「どうしたの？、やっぱ変なところある？」

そう言われると大和は視線を逸らし頬を掻きながら

「あ、いや、なんか新鮮だなと思ってな」

「ふーん？」

「それよりとつとと飯食おうぜ」

「あ、うんそうだね」

二人は朝食を摂るため下の階へ降りた

「そう、あなた達が今日転校するっていう芳野大和君と望月美咲さんね」

学校に着いた二人は転校の手続きの為職員室へ来ていた

「わかったわ、それじゃあ二人のクラスへ案内するわね」

「はい」

「よろしくお願いします」

教師に導かれ新しいクラスへ向かう

「ここよ、ちょっと待っててね」

そう言い教師が教室へ入っていく

『はい、席に着きなさい！ホームルーム始めるわよ』

「うう、緊張するね・・・」

大和の隣で美咲が不安そうに言う

「まあ入学したときみたいによれば大丈夫だろ、なんかあってもオレがなんとかしてやっから」

「うん・・・」

『えー、最後にこのクラスに転校生が来ることになりました』

その教師の言葉に教室はドツと騒ぎ出す

『はいはい静かに！それじゃあ二人とも、入ってきて』

「んじゃ、いくか」

「う、うん・・・」

二人は教室のドアを開け入っていく、すると教室がざわつきだす

「それじゃあ二人とも自己紹介をよろしく」

「はい」

先に大和が一步前に出て自己紹介する

「芳野大和です、よろしく」

自己紹介が終わり大和は一步下がる

教室からは、ちょっとかつこよくない？とか、えーそう？とか言う声が聞こえた

そしてこんどは美咲が一步前へ出る

「え、えと、望月美咲です、よろしくお願いします」

そう言いペコリと頭を下げる

教室からはまた、かわいくねあの娘とか、ああかわいいよなとか聞こえた

「えー二人は家庭の事情で少しの間この学校に通うことになりました、皆仲良くしてあげてね」

教師の言葉に生徒ははいと答えた

（なんかおもしろいクラスだな）

その光景に大和はそう考えていた

「はい！てなわけで転校生に質問のコーナー！」

一時限目の授業が終わると二人の周りにクラスのほとんどの生徒が集まっていた

「・・・・・・」

「ふえ、え？」

この状況に大和は哑然とし美咲はおろおろしていた

「さぁみんな！この二人に質問はあるか？」

「どこから来たの？」

「趣味は？」

「どんな異性がタイプ？」

「二人ってどんな関係？」

「俺と付き合ってくれ！」

生徒の一言で二人は質問攻めにあう

（てか一人おかしいのがいるぞ）

大和は心の中でツツコんだ

「ふええ！あの、えと、あのー」

美咲はいくつもの質問にあたふたしていたのだった

「やっと昼か・・・」

午前の授業が終わり昼休みになった
あの後も休み時間になるたびに質問攻めを受けていた二人は少々ぐ
ったりしていた

「よっ転校生」

声をかけたのはさっきの質問攻めには参加していなかった生徒だった

「ん？何か用か」

声をかけた生徒に体を起こしつつ聞き返す

「いやな、お前ら転校してばっかで学食とか場所わかんねえだろ、だから案内してやろうと思っとな」

「ああ、そいつは助かる。美咲はどうする」

大和より多少ぐったりしていた美咲も体を起こし答える

「うん、私もいくよ」

「よし、んじやついてきな」

「そーいやお前名前は？」

聞かれた生徒は振り返り

「俺は一之瀬^{いちのせ} 勇樹^{ゆうき}ってんだ、よろしくな！」

と爽やかな笑顔で答えた

エピソードクウガ 第一章 〈転校初日〉（後書き）

クウガ編の主要人物の一人、勇樹の登場です
次回はついに事件が起こるかもです

エピソードクウガ 第一章 く気さくな兄妹く（前書き）

大和達と勇樹が仲良くなっていけます
では、どうぞ

エピソードクウガ 第一章 く気さくな兄妹く

昼休み、大和と美咲は一之瀬勇樹と名乗る少年に連れられ食堂へ向かっていた

「まあ、あいつらを悪く思わないでくれや、よそから来たのがめずらしいだけだったんだ」

「別にんなこと考えてねえよ、ただ少し疲れただけだ」

勇樹はすぐに大和と意気投合したらしく親しげに話していた

「お兄ちゃん!」

「ん? おう、綾香!」

勇樹をお兄ちゃんと呼んだ少女は小走りでこちらに向かってきた

「お兄ちゃんもこれから?」

「ああ、お前もか」

「うん! あれ、その人たちは?」

少女が大和と美咲を覗き込む

「ああ、今日クラスに転校してきたんだ」

二人は一歩前に出て少女の前に立つ

「芳野大和だ、よろしく」

「望月美咲です、よろしくね」

「はい！あたしは一之瀬綾香あやかです！こちらこそよろしくおねがいします！」

三人の自己紹介が終わると勇樹が手を叩き注目させる

「はいはい、自己紹介が終わったところでそろそろ行こうぜ、座れなくなっちまう」

「おっと、そうだな」

こうして四人は食堂へ再び歩を進めた

「へえ、お二人は一緒に住んでるんですか」

「つつてもオレは居候みたいなもんだがな」

なんとか席と昼食を確保できた大和たちは他愛もない話をしていた

「そういやお前らって家庭の事情とかでこっちに來たんだろ、親はどんな仕事してんだ？」

その言葉に大和と美咲の箸が止まる

「親は・・・」

「・・・死んでるよ」

「「えっ？」」

素っ気なく言った大和の言葉に二人の箸も止まる

「オレたちがまだ小さい頃に事故で死んだ」

「そ、そっか・・・なんかすまんな」

ばつが悪そうに勇樹が言う

「気にすんな、初めてじゃねえんだ」

「本当にすまん」

「気にすんなっつーの、ほら、うどん伸びるぞ」

「あ、ああ」

しばらく気まずい空気が流れたがすぐにまた他愛のない話に戻った

「終わった・・・」

一日の授業が終わり生徒達は帰りの支度をしたたり部活の準備をしたりしていた

「大和！」

大和も帰りの支度をしていると勇樹に声を掛けられた

「お前も帰るだろ、だったら一緒に帰ろうぜ」

「ああ、いいぜ、美咲も帰るだろ？」

「あ、私はお使い頼まれてるから先に帰ってて」

「んじゃ俺も付き合うぜ、大和もそうするだろ」

「ああ、でもいいのか？」

「いいさ別に、そうだ、確か綾香も買い物があるとか言ってたし、
いっそ商店街も案内するぜ」

「本当？助かるよ」

「んじゃ、綾香に伝えてくるから校門で待っててくれ」

「わかった」

そして勇樹は走って教室を出てった、大和と美咲も鞆を持って教室
を出た

「ありがとう、勇樹くん、綾香ちゃん、おかげで頼まれてたものが買えたよ」

「いってことよ、俺たちはもう友達だろ」

「そうです、私達は同じ釜の飯を食べた友なのです」

「いや、学食と一緒に飯食っただけだろ」

商店街で買い物を終え四人は帰り道を歩いていた

「あ、そうだ、お前達に聞きたいことがあるんだが」

「ん？なんだ」

途中大和一之瀬兄妹に聞き出した

「実は・・・」

言いかけたところで警報が鳴り出す

「なんだ!？」

『未確認生命体出現!今すぐに非難してください!繰り返します・・・』

「未確認生命体・・・ってことは」

「グロンギ！」

「あ、おい！勇樹！」

放送を聞いたとたん勇樹は走り出す、そしてそれを大和たちも追い掛けた

とある工場の前、グロンギは警察の発砲をものともせずにした

「くっ、やはり効かないっ」

「ジャラゾグスバ」

謎の言葉を発し警官に襲い掛かる

「うわぁ！」

「「どりゃぁ!!」」

そこに大和と勇樹が跳び蹴りを入れグロンギを突き飛ばす

「って、なにやってんだ大和!? お前は下がってろ！」

「そういうな、オレは強いぜ。 お前こそ下がってな」

「強いとそういう問題じゃねえ！」

そして言い合いを始めた

「とにかく下がってろ! 俺がやる！」

「あ、おい！」

大和を後ろに下げ勇樹が前に出る、そこに美咲と綾香も到着する

「はぁはぁ、二人とも速いよ・・・」

「ふう、さぁ大和さん美咲さん、下がっててください！」

「ってお前もかよ、なんだ、勇樹に何ができるってんだ?」

「まぁ見ててください！」

「「？」」

そう言われ二人は勇樹に注目する

「さあ化け物め！俺が相手だ！」

グロンギに宣戦布告すると勇樹は腰に手をかざす

「な！？」

すると勇樹の腰にベルトが出現した、そして右手を左肩の前に突き出しそれを右にスライドさせていった

「変身！」

そして左腰のスイッチを右手で押した
すると勇樹の体に変化しこの世界の仮面ライダー、クウガに変身した

「うそ！？勇樹くんが！？」

「こいつがクウガ・・・」

「いっけえ！お兄ちゃん！」

大和と美咲は驚き綾香は変身した兄を応援していた

「いくぞ！」

そう叫び、クウガはグロンギに突っ込んでいった

エピソードクウガ 第一章 く気さくな兄妹く（後書き）

一之瀬兄妹はこれからどう関わらせていくか、考えどころです
そして次回はクウガとグロンギの戦いです
ちなみにグロンギ語は一応調べました

エピソードクウガ 第一章 く古代の戦士く (前書き)

ひとまずここで区切りをつけます
では、どうぞ

エピソードクウガ 第一章 〈古代の戦士〉

「おりゃあ！」

変身した勇樹、クウガがグロンギに殴りかかり戦闘が始まった

「は！おりゃ！どおりゃあ！」

クウガはパンチやキックを次々とグロンギに叩き込む、だがグロンギもやられっぱなしではなかった

「ギギビジバスバ」

「うお！？」

グロンギはクウガを殴りそれを受けたクウガは一瞬ひるむ

「このやろ！」

体制を立て直すとクウガは落ちていたパイプを手取る

「超変身！」

再びベルトに手をかざすとクウガの体とベルトの赤い部分が青く変わり「ドラゴンフォーム」に姿を変えた

「色が変わった！？」

「あれがドラゴンフォームか」

その光景に離れて見ていた美咲と大和はそれぞれの反応を示していた

「ドラゴン？何ですかそれ？」

そして隣で応援していた綾香は大和のセリフについて聞く

「クウガにはいくつかの姿がある、さっきまでの赤い姿は格闘戦に特化した「マイティフォーム」、今の青い姿は俊敏性が強化された「ドラゴンフォーム」、他には緑の姿の超人的な感覚神経を持つ「ペガサスフォーム」、紫の姿の攻撃力と防御力が高い「タイタンフォーム」、他にもあるらしいが基本的にはこの四つを使って戦うようだ」

大和は綾香の質問に頭の中の情報を読みながら答える

「へえ、詳しいんですね大和さん。警察や科学者でも知らないよ
うなクウガのことたくさん知ってるなんて」

「まあ、ちょっといろいろあってな」

その辺は知られるといろいろ面倒なので濁した
その間にクウガは持っていたパイプをドラゴンロッドへと変化させ
グロンギに突っ込んだ

「大和くん、勇樹くんが持ってたパイプが変わったよ！」

「あれはクウガの能力だ、マイティ以外の姿はその姿によって手に
持った物を自分専用の武器にできるんだ。 つってもその形に近い

ものしかできないけどな」

今度は美咲が聞いてきたので大和は答える

「あ！工場の中に入っていつちゃった」

クウガとグロンギは戦いながら工場の中に入っていった

「オレ達も行くぞ」

大和が工場に向かい美咲と綾香もそれに続いた

「はあああああ！はあ！」

ドラゴンロッドで次々と攻撃していくクウガにグロンギは押され気味だった

「ブ・・・ボボララゼザ！」

身の危険を感じグロンギは逃げようとするがクウガに回り込まれる

「これで終わりだ！スプラッシュドラゴン！」

グロンギはドラゴンフォームの必殺技を喰らいその体にクウガの紋章が浮かび上がる

「ズゴ・・・ブガガ！」

そして断末魔と共にグロンギは爆発した

「よし、いっちょ上がり・・・」

「後ろにまだいるわ！」

「なに！？」

ドラゴンロッドを地面に突き勝利の余韻に浸っていると後ろから聞こえた女性の声に後ろを振り向く
そこには翼を広げクウガに突っ込む新たなグロンギがいた

「うお！」

なんとかそれを避けグロンギを見た

「今度は飛ぶのかよ！？」

「勇樹！これを使いなさい！」

警官服を着た女性は腰の銃をクウガに投げ渡す

「おっと、サンキュー。超変身！」

クウガは「ペガサスフォーム」へと姿を変え銃をペガサスボウガンに変えた

そして遅れて大和たちが工場の中に入る

「ん？今度はペガサスか」

「とうちゃーく！あ、お母さん！」

「え？」

大和達の声に振り向く女性

「綾香！？こんなところ来ちゃだめでしょ！ それにあなた達は？」

「あいつのダチです、あなたはこいつらの母親？」

「え、ええ、ってそうじゃなくて！危ないからここから離れなさい」

「あの、グロンギも勇樹くんも行っちゃいましたよ」

美咲がそう言うと同はさっきまで戦っていた場所を見る、だがそこには誰もおらず代わりに天井に穴が空いていた

「上か、行くぞ」

「ちょ、だから待ちなさい！」

勇樹達の母親の制止を無視し大和たちは階段を登っていった

「よっと、ってもう終わったか」

大和達が着いたときには既にグロンギはおらず変身を解いた勇樹がいただけであった

「ああ、逃げられちゃった」

そう言い勇樹はグロンギが飛んでいったであろう方向を見つめる

「ちょっとあなた達」

勇樹達の母親は大和達に話しかけた

「ん？なんすか」

「あんなところに一般人が入り込んだら危ないでしょ！」

「いや大丈夫ですって、オレ戦えますし」

「そういう問題じゃない！たどえそうだったとしてもあなた達はまだ子供なんだからこういうことは大人に任せていればいいの！」

「そういう割には勇樹を戦わせてたじゃないっすか」

「それは・・・」

言われて勇樹達の母親は言いごもる

「クウガが唯一グロンギを倒せるからだよ」

代わりに勇樹が答えた

「それに俺は民間協力者として扱われてるからいいんだよ」

そう言いながら元に戻った拳銃を母親に手渡した

「ま、母さんもこの辺でいいだろ。それより帰ろうぜ、俺腹減っちゃったし」

「え、ええ・・・」

勇樹達の母親は複雑そうな顔をしながら銃を受け取り答える

「あ、遅れましたが俺は芳野大和です」

「私は望月美咲です」

「そう、私は一之瀬 薫^{かおる}よ。ちょっと失礼」

勇樹達の母親、薫は携帯を取り出し相手と会話する

「一之瀬です、はい、一体は倒しましたが一体は逃がしました、ええ、わかりました」

携帯を切り勇樹達の方を向く

「ごめん、これから署で会議が入って今日は遅くなるわ」

「ええー」

「まじかよー」

「ごめんね、晩御飯はお弁当とかで済ませて」

「「ぶーぶー」」

勇樹達是不満の抗議を挙げる

「あ、じゃあ二人とも家に来る？」

「「「え？」」」

美咲の提案に三人は同時に聞き返す

「だから二人とも家で晩御飯食べてったらどうかって」

「ほんと！？いいの美咲さん？」

「うん、家は大丈夫だよ。薫さんもそれでいいですか」

「ええ、でもいいの？家の人に迷惑じゃないかしら」

「多分大丈夫ですよ、じいちゃんそういうの気にしないっすから」

「そう？じゃあお言葉に甘えて、二人とも、あまり迷惑かけちゃだめよ」

「「はい」」

「それじゃあよろしくね」

そう言って薫は立ち去った

「んじゃ、帰るとするか」

「うん」

「「お世話になります」」

そして四人は望月写真館へ向かった

次回、仮面ライダーディケイド Another

「私にクウガのこと教えてください！」

「なんだとてめえ！」

「お前はもう戦うな」

「やっとオレの出番か」

「未確認生命体・・・十号？」

「お母さん！！！」

全てを紡ぎ、未来へ導け！

エピソードクウガ 第一章 く古代の戦士く（後書き）

てなわけで一応第一章終了です

第二章はちょっとシリアスな展開になる予定です

エピソードクウガ 第二章 く妹の思いく (前書き)

今回から第二章です
では、どうぞ

エピソードクウガ 第二章 く妹の思いく

「こりゃあどういことだ？」

大和達は望月写真館に到着したとたん信じられないような光景に遭遇した

「こんなにお客さんがいるなんて始めてかも・・・」

それは写真館にたくさんの客が入り浸っていたというものだった

「てかここって潰れた喫茶店じゃなかったか」

「うん、結構前に潰れてたはずだけど・・・。ここが二人の家なんですか」

「ああ、まあそういうことになるが」

「と、とりあえず裏口から入ろっか」

美咲に促され大和達は裏口から中に入っていった

「「ただいまー」」

「おお、二人ともいいところに、こっち手伝ってくれ」

宗太郎は何人もの客の接客をしていて疲れ気味だった

「あいよ、にしてもすげえ客だな」

「うん、お昼前は少しだけだったのに午後から急にお客さんが増えてね」

「ああ、この辺は情報が広まるのが早いですから」

後ろから綾香が顔を出しそう言う

「おや、その子達は？」

「新しい友達だよ、一之瀬勇樹くんと妹の綾香ちゃん」

「勇樹です」

「綾香でーす」

「そうかい、美咲の祖父の宗太郎です」

兄妹が挨拶をし宗太郎も自己紹介した

「それで今日二人に家で晩御飯食べてもらおうと思ったんだけど、いいかな？」

「ああ、構わないがしばらく掛かるよ」

「俺達は大丈夫です、それよりなにか俺達にも手伝えることありませんか」

「それならこれをあのテーブルに運んでくれないかな」

「はい、わかりました」

そう言って勇樹は皿に乗った料理を持っていった

「あ、私も何かします」

「ならあのテーブルを片付けてくれないかな」

「アイアイサー！」

綾香も元気に返事をして走っていった

「ショートケーキとミックスサンドできたぜ」

「あ、じゃあ私持っていくね」

「すいませーん、オーダーお願いしまーす」

「はーい、ただいまー」

そんなこんなで慌しくもなんとか五人で店を回していった

「「「「いただきます」」」」

店の閉店時間になり落ち着いたのは八時過ぎとなっていた

「すまないね、こんな時間になってしまった。しかも二人にはお客さんだというのに手伝ってもらっちゃって」

「いえ、ご馳走してもらうのになにもしないのは失礼ですんで」

「でも本当にすごい人の数でしたね」

「うん、あんなに来たのって今までなかったと思うよ」

「つーかここ本来は写真館なんだけどな」

五人は談笑しながら少し遅れた夕食を摂っていた

「それにしてもこれおいしいですね、美咲さんが作ったんですか？」

「うん、小さい頃から料理の手伝いとかしてたから」

「へえ、すごいです美咲さん」

「そ、そんなことないよ。綾香ちゃんも練習すればこれぐらいすぐにできるようになるよ」

「あー、綾香には無理無理、こいつ家事とか苦手だし」

「あー、お兄ちゃんひどい！」

「そう言うお前は、皿割ってたよな」

「うっ、ばれてた？」

「やーい、言われてやんのー」

「うるせえ！」

「まあまあ」

「はっはっは、こんなににぎやかな食事は久しぶりだね」

「たしかに、あんま家に誰か呼ぶこと少なかったしな」

「それに二人にこっちでもう新しい友達ができてうれしいよ。二人とも、美咲と大和くんをよろしくたのむよ」

「いえ、こちらこそよろしくおねがいします」

「不束者の兄妹ですが」

「それじゃあお見合いみたいだぞ、お前ら」

「おっといけねえ」

「」「」「ははははは」「」「」

場所は移って大和の部屋、大和、美咲、勇樹、綾香の四人はここに集まっていた

「で、いつお前はクウガの力を手に入れたんだ？」

大和が勇樹に質問した

「なんでそんなこと聞くんだ？」

「こっちにもいろいろ事情があってな」

「ふーん、まあいいが。この力を手に入れたのは大体二ヶ月ぐらい前になるかな」

勇樹は前置きをして話し出した

「そのころ、この辺にあの怪物が現れたんだ」

「グロンギか」

「そんな名前だったのかあいつら、それは置いて、俺はそいつらに襲われて絶体絶命となったんだ。そのとき突然拾った石が光りだしてベルトになったんだ」

「光る石って？」

「襲われる前に変な洞窟に落ちてたんだ、それ以来あの洞窟は塞がっちまったがな」

（おそらくその石がアークルの源で洞窟がリントの遺跡だろうな）

「んで、そのベルトで変身して難を逃れたってわけだ」

「なるほど、それからお前はその力でグロンギと戦ってきたってわけか」

「ああ、今日倒したので確か六体目だったかな」

「ほお、数えてたのか」

「いや、警察はあいつらのこと未確認生命体って呼んでて、一号二号って数えてんだ。で、今日倒したのが七号」

「ということはあの逃げたのが六号あたりか」

「いや、あれは初めて見る奴だから八号だ」

「じゃあ一体まだ倒してないのがいるってこと？」

「そういうことじゃないんだ。クウガは未確認生命体四号って呼ばれてんだ」

「なるほど、そういうことか」

「まあ、これが俺がクウガになった経緯だ」

「ああ、いろいろありがとな」

「あの、大和さん」

「ん？なんだ」

「大和さんってクウガのこといろいろ知ってましたよね」

「まあな」

「私にクウガのこと教えてください！」

「ああ、いいぜ」

「ホントですか？ やったー！」

「なんで綾香ちゃんはクウガのことを知りたいの？」

「だってカッコイイじゃないですか！ それにいろいろ知ってたらお兄ちゃんの力になれるかもですし」

「綾香・・・」

「そういうことならオレの知ってる限りのこと、全部教えてやるよ」

「ありがとうございます！」

こうして綾香は大和にクウガについて教えてもらったのであった

「それじゃあごちそうさまでした」

「ごちそうさまでしたー」

「子供達がお世話になりました」

時計が十時を切ったころ、薫が会議を終わらせ二人を迎えに来た

「いえいえ、こちらもうしぶりにぎやかで楽しかったですよ」

「またいつでも来いよ」

「また明日」

大和達も二人を見送りに表へ出ていた

「大和さん、教えてもらったこと役立たせまーす」

「ああ、頑張れよ」

一之瀬一家はこうして帰っていった

「綾香ちゃんって、お兄さん思いだね」

「ああ、そうだな」

「さあ、二人も中に入りなさい、風邪をひくよ」

「あいよ」

「はい」

（妹にあんま心配させんなよ、兄貴）

そんなことを考えながら大和は家に戻っていった

エピソードクウガ 第二章 く妹の思いく（後書き）

いやー、セリフばっかになってしまったが大丈夫かな？

エピソードクウガ 第二章 〈この町のヒーロー〉(前書き)

二週間も空けてしまった・・・orz
ひとまず、どうぞ

エピソードクウガ 第二章 〈この町のヒーロー〉

大和と美咲が転校し、グロンギが襲撃した次の日

「はよーっす」

間の抜けた挨拶をしながら大和が教室に入る

「おはよー」

その後ろに続いて美咲も教室に入った

「あ、芳野君、望月さん！」

それに気づいたクラスの女子が二人に話しかけた

「ねえねえ、昨日二人が未確認生命体に襲われたってほんとう！？」

「「え？」」

突然聞かれたので一瞬なんのことかわからなかった

「昨日見た人がいるんだ、未確認生命体に襲われてそこをクウガに助けられたって」

そこまで言われてやっと理解した

「いや、オレ達は勝手に首突っ込んだだけで別に襲われたとかじゃないんだが」

「えっ！？ そうなの？」

「う、うん」

大和にそう答えられ、美咲にも肯定された女生徒はがっくりした表情を浮かべた

「なんだー、せっかくスクープになると思ったのに」

「スクープ？」

「うん、私新聞部なんだ、んで転校初日に未確認生命体に襲われた町のヒーロークウガに助けられた二人って題名で作ろうと思ったのになあ」

あーあ、今週のネタどうしようと呟いているこの新聞部の女生徒が言った台詞に大和はある疑問を覚えた

「なあ、クウガってこの辺じゃ有名なのか？」

「そりゃあ、なんせ未確認生命体からこの町を救いに来たヒーローって現れた始めはすごい噂になってたんだから」

少し興奮気味で説明する女生徒に圧倒されつつも話を続ける

「んじゃあクウガの正体とかもみんな知ってんのか」

「それがだんれも知らないんだ、だからもしかしたら正体知ってるかなと思って二人に聞いてみたんだけど。もしかして正体見たり

とかした!？」

再び興奮気味で迫ってくる女生徒に仰け反りながら大和は答える

「い、いや、知らねえよ。なあ」

美咲に同意を求める、言うなよと目でサインしながら

「えっ、あ、うん見てないよ」

「そっかあ、残念。もし見たら私にも教えてね」

そう言い残し女生徒は教室から出て行った、同時に勇樹が教室に入ってきた

「オッス！」

右手を上げ軽快な挨拶をしながら勇樹が大和達の元にやってきた

「おう」

「おはよう」

「昨日はサンキューな」

「ううん、こっちこそお店手伝ってもらったんだし、おあいこだよ」

「そっか？まあとにかく助かったよ」

そこで大和はさっきの会話を思い出した

「なあ、勇樹」

「ん？なんだ」

「お前の・・・」

そこまで言って止まる、人が多いここで言うのもあれだなと想い場所を移そうかと思ったがもうすぐでホームルームが始まる時間だった

「俺の、なんだ？」

「いや、後でいい。ここで話すのはやばそうだし」

その言葉で勇樹は察し

「判った、昼休み辺りで話そうぜ」

勇樹の提案に大和は頷いたところでチャイムが鳴った

「んじゃ、後でな」

担任が入ってきたので勇樹だけでなく他の生徒も席に着いた

「・・・で、どうなんだ」

時は進んで昼休み、昨日の面子で昼食を摂りながら今朝のことを説明して大和は勇樹に聞いた

「なにが？」

「ようはお前がみんなに自分がクウガだってこと黙ってんのかってことだ」

周りに聞こえないよう小さめの声で話す

「まあな、母さんから口止めされてんだよ。あんまり自分がクウガだって言うなってな」

「でも昨日は私達の前で堂々と変身してたよね」

うどんをすすっていた美咲が会話に割り込み質問した

「ああ、あの時は緊急事態というかお前らが着いてくると思ってたなかったし」

「普段は警察の人達が一般人を非難させてるもんね」

勇樹がそう言うのと綾香が補足した

「そうになると学校の連中で俺の正体知ったのって二人が初めてだな」

「なるほどな、まっ俺達も探す手間が省けたからいいんだが」

「探すってクウガをか？」

「ああ、ちよつと訳ありでな」

「そういえばクウガのこと知ってるって言った時も訳ありって言うてましたがどんな訳ありなんですか？」

綾香に聞かれ大和の箸が止まる

（まだ少し早いよな・・・）

「まあそのうち話すよ」

そう言い再び大和は定食を食べ始めた

そして放課後

「大和、美咲、帰ろうぜ」

大和が支度をしていると勇樹が誘ってきた

「ああ、美咲も大丈夫だろ」

大和は鞆に教科書等を入れていた美咲に聞いた

「うん、今日はお使い頼まれてないから大丈夫だよ」

「んじゃ、今日はどっか寄ってかねえか」

美咲の了解を得た大和は勇樹に提案する

「お、いいぜ。 商店街の逆の方にも行ってみるか」

「おう、そうと決まればとっとと行くか」

鞆を背負い教室から出ようとする今朝の新聞部の女生徒が駆け込んできた

「大変！未確認生命体がこのすぐ近くに現れたって！」

その言葉に大和達だけでなく教室に残っていた生徒全員が驚いていた

「うそ、やばくない？」

「巻き込まれないうちに帰ろうぜ」

「いや、ここにいた方が安全かも」

生徒達は混乱し次第に他のクラスからも騒ぎ声が聞こえてきた

「勇樹」

「ああ、いくぜ！」

大和と勇樹が一目散に教室から出てそれに遅れて

「あ、待って！」

美咲も二人を追いかけた

「キャアーーー！」

今まさに下校途中であろう生徒がグロンギに襲われていた

「ビガラゾボソゲダガドジドシザ」

そのグロンギは昨日クウガが倒し損ねた八号であった。そして生徒に向かって襲い掛かろうとしていた

「うおおおおおおおー！！」

そこに間一髪で大和が飛び込み生徒を抱え回避した

「ザセザ！？」

「危ないから逃げてろ！」

「は、はい！」

生徒は走ってその場から離れた

「よし、今度こそオレが・・・」

大和は懷からドライバーを取り出そうとするが

「変身！！」

勇樹が走りながらクウガに変身してグロンギに飛び掛った

「な、またか!？」

「お前も下がってな、大和」

そしてクウガはグロンギと戦い始めた

「オレ・・・救世主なんだよな・・・?」

大和はまた変身すらできなかったことに軽いショックを受け、美咲が来るまでしばらく立ち尽くしていた

エピソードクウガ 第二章 〽この町のヒーロー〽（後書き）

いったいいつになったらディケイド出すんだ、自分

大和「オレって主人公なんだよな？」

一応そうだが話の流れからしてまだしばらく出せないかな

大和「えー」

エピソードクウガ 第二章 〈現れた青年〉（前書き）

やっとシリアスモードになります

では、どうぞ

エピソードクウガ 第二章 〈現れた青年〉

「くそっ！飛ぶなんて卑怯だろ！？」

飛び掛って戦いを始めたまでは良かったのだが距離を取った隙に八号は飛び、そこから空中から攻撃してくるのでクウガにとって戦いにくい状況だった

「緑になれりやあまだ何とかなるのに・・・」

この緑とはペガサスフォームのことであり、これに超変身すれば遠距離攻撃ができるのだ。だがそれも叶わずクウガはひたすら八号からの攻撃を回避していた

「うおお！チクショー、母さん達警察はまだかよ！？」

警察に拳銃を借りられればペガサスフォームになれるがその警察も先ほど呼んだばかりで来るにはまだ掛かる

「苦戦してるね、勇樹くん」

クウガの様子を見て美咲が呟く

「ああ、やっぱりここはオレが・・・」

大和はここぞとばかりにドライバーを取り出そうとするが

「お兄ちゃん！」

そこに綾香が駆け付け、 またも邪魔された

「なんだ！？ どんだけオレを戦わせたくないんだこの世界は！」

「ま、まあまあ・・・」

変身すらできないことに大和はこの世界に向かって突っ込みをし美咲がそれをなだめた

「綾香！？ 危ないから下がって・・・」

「これ使って！」

クウガが言い終わる前に綾香はクウガに水鉄砲を投げた

「水鉄砲・・・！、これなら！」

なにか気づいたように顔を上げ手をベルトにかざす

「超変身！」

そしてクウガは緑の姿、ペガサスフォームへと姿を変えた

「・・・・・・・・」

クウガは手に持った水鉄砲をペガサスボウガンに変え、それを眉間の位置に持っていて集中する

「・・・・・・・・そこだ！」

「バビ!？」

引き金を引き、クウガが放った一撃は浮遊していた八号に命中した

「よし、これで止めた!」

トリガーを引き、八号に狙いを定めて放とうとした

「お兄ちゃん後ろ!」

「なにっ!? ぐあ!」

だがそこに新たなグロンギが現れクウガに襲い掛かった

「ラダジャラゾグスバ、クウガ」

今度のグロンギ・・・九号は牛、と言うよりは闘牛を連想させる角が特徴的だった

「くそっ、二対一か。それにこの姿じゃ接近戦はきつい、なら!」

そう言うのとペガサスボウガンをグロンギ達に撃ち、すかさず距離を距離を取る。放った弾丸は九号に弾かれたが

「超変身!」

構えを取り、再びマイティフォームへ戻って接近戦を始める

「はっ! おりゃあ!」

マイティフォームお得意の肉弾戦でグロンギ達にダメージを蓄積させていく

「はああ！」

回し蹴りで二対を吹き飛ばし、隙ができたところでクウガは右足に力を貯める

「うおおおおお！喰らえ！マイティキック！！」

そして二体のグロンギにマイティフォームの必殺技の跳び蹴りをする。九号はとっさに回避したが八号には命中し、その体にクウガの紋章が浮かび上がる

「ブ・・・グゴゴ！」

八号の体は断末魔と共に爆発した

「さあ、次はお前だ！」

そう言って九号に近づくクウガ、九号はその場にあったドラム缶を掴み上げクウガに向けて投げる

「へっ、そんなの当たるかよ！」

平然とそれをかわすが投げたドラム缶の先には

「！綾香！」

「綾香ちゃん、危ない！」

「へ？」

綾香が立っており、大和が気が付き駆け出すが距離があるため間に合わない

「しまった！」

「きゃあーーーーー！」

思わず目を瞑り首を引っ込めた、だが綾香にドラム缶は当たらなかった

「・・・・・・・・あれ？」

「大丈夫か、綾香ちゃん」

自分の名を呼ばれ、綾香は目を開き顔を上げる

「し・・・・紳一さん」

そこには警察官が綾香を覆いかぶさるようにして立っていた、そして彼の後ろでドラム缶が転がっていた

「綾香、大丈夫か！」

そこに大和と美咲も駆け付ける

「はい、真一さんが庇ってくれたので」

「あなたは・・・？」

美咲が見上げる形で聞く、その人は身長は大和達を越え、体もがっちりとしていた

「俺は坂本さかもと 紳一しんいち、綾香ちゃんのお母さんの部下の者だ」

紳一と名乗った青年は身だしなみを直しながらそう言った

「さて、未確認生命体には逃げられたか」

そう言われ回りを見渡すとそこにはもう九号はいなかった、代わりに紳一を見つめ立ち尽くしていたクウガがいた

「・・・紳一さん」

クウガは変身を解き勇樹に戻る、その勇樹は少々浮かない顔をしていた

「・・・久しぶりだな・・・勇樹」

二人が険悪な空気を醸し出し、その場には遠くからのパトカーのサイレンだけが響いた

エピソードクウガ 第二章 〈現れた青年〉（後書き）

てなわけで新キャラです

彼と勇樹の間にはいったいなにが・・・？

エピソードクウガ 第二章 装者 (前書き)

今回はだいぶグダグダになってしまいました

それでもOKというならどうぞ

エピソードクウガ 第二章 〈装着者〉

とある山奥の洞窟、そこに三体のグロンギが石碑を囲んで話し合っていた

『ついに我々も三人になってしまったか』（グロンギ語で話しますが話の都合上会話を日本語で表示しています）

『だがあと一人、それで我々の王は復活する。そうすれば仲間も復活するだろう』

『しかし、この時代にあのクウガも蘇るとはな』

そこにはこれまでに大和達の前に姿を現したグロンギだけでなく他に三体のグロンギがいた

『それなら問題無い、今回の戦いでヤツの弱点が判った』

『弱点だと？』

九号の言葉に他の二体は注目する

『うむ、それは・・・』

九号は他の二体に顔を寄せ彼らも九号に耳を寄せた

『ふふふ、なるほどそれは面白い』

『では早速実行に移る』

そう言って九号は翼を広げ洞窟から飛んでいった

『さて、我々も最後の仕上げといこう』

残った二体はまた石碑に向かい合って何かを始めた

場所は移って警察署会議室、そこに大和や美咲、一之瀬一家。そして紳一を含む警察の人間が何人か集まっていた

「お久しぶりです、先輩」

紳一が薫に敬礼をしながら挨拶をした

「久しぶりね坂本君、それにしてもあなた特殊部隊に就いたのにな

ぜこんなところに」

「それは私から話そう」

「署長」

薫は少し驚いた表情でそこに現れた古い始めの署長と呼ばれた警官に顔を向けた

「度重なる未確認生命体の襲撃に警察も本格的に対策を取り始めたのだよ」

「対策、と言いますと？」

「それはこれだ」

そう言って署長はモニターにある画像を表示した

「こ、これは・・・」

その光景に一番に声を上げたのは勇樹だった、他の面々も驚きの表情を見せる中、大和だけは真剣な眼差しでモニターを見ていた

「これは未確認生命体四号の戦闘データを元に我々が作り出した戦闘スーツ、その名も・・・」

「G－3システム」

署長が言う前にその名を呼ばれそこにいた者全てが声の主の方を向く、その声の主は大和だった

「な、何故君がG－3システムを知っている」

署長は驚きを隠せず大和に聞き寄る

「まあ俺はいろいろ詳しいんで、そして紳一さんがここに来た理由はこのG－3システムの装着者で、未確認生命体が多く出現するこの地区に呼ばれたってところでしょ」

大和のセリフに署長は哑然としていた

「ははは、ただ者じゃないとは思っていたけどここまでとはね」

そう言って紳一は大和に近づいた

「君はいつたい、何者だい？」

「強いて言うなら、通りすがりの高校生です」

大和はニヤリとしながらそう言った

「ふっ、今はそう言うことにしておこう」

紳一も不敵に笑って、再び署長の方へ向いた

「署長、もうこんな時間ですし彼らは返した方が良いでしょう」

「あ、ああそうだな。では坂本君、一之瀬君、彼らを頼む」

「はい、では失礼します」

そう言って紳一は会議室から出て行った

「んじゃ、オレ達も行くか」

「う、うん」

大和と美咲も会議室から出る。その中、勇樹が終始思いつめた顔をしていたのを大和は見逃さなかった

「・・・・・・・・」

警察署から出ても勇樹の表情は浮かないものだった

「・・・先輩、ちょっと勇樹と話がしたいのですがよろしいですか」

紳一のその言葉に勇樹は体をビクリとさせる

「ええ、構わないわ」

「では、勇樹、あっち行くぞ」

そう言って紳一は警察署の裏へ向かいその後ろに勇樹が着いて行った

「・・・・・・・・」

大和はその二人の後ろ姿をしばらく見つめていた

エピソードクウガ 第二章 装者 (後書き)

ああ、シリアスって難しい・・・ (オイ

次回はもっとしっかりやろう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4644x/>

仮面ライダーディケイドAnother ～世界の救世主～

2011年12月19日14時47分発行